

「私自身も、在宅に関わって、看取りを経験するなかで、最期を家で迎えたいという人の気持ちはすごく尊いものですね、

生きることに着目して
在宅医療を追求してほしい



な対応をしたのか、なぜその判断をしたのか、と、確認や指示が飛び交う。経験豊かな薬剤師が若手を指導する場面も日常の風景。そんな様子から、患者と日々正面から向き合っている現場の臨場感がひしひしと伝わってきた。



Interview with
Reiko
Utsunomiya

団塊の世代が75歳以上となる2025年に向けて、医療機能の分化や連携地域包括ケアシステムの構築が推進されてきた。薬剤師、薬局もまた、その只中で、在宅医療へとその役割の幅を広げている。早期から在宅医療に取り組む一般社団法人ファルマプランが運営するあおぞら薬局は、健康サポート薬局大阪1号店にも認定された。30年以上前から在宅訪問をしながら、患者の生活に近い場所で健康を支え続ける4代目の理事長を務める宇都宮勸子氏に、在宅医療における薬剤師の役割や、その取り組みについてお話を伺った。

健康になりたいという思いを支え
地域のなくてはならない存在に。【後編】

うつのみや れいこ
宇都宮 勸子氏
一般社団法人大阪ファルマプラン 理事長

PROFILE
1991年武庫川女子大学薬学部卒業後、医療法人協和会協立温泉病院薬剤部入職。1993年有限会社(現一般社団法人)大阪ファルマプランに就職。あおぞら薬局、あおば薬局の管理薬剤師を経て、2023年に同法人理事長に就任。全国薬剤師・在宅療養支援連絡会(J-HOP)副会長/日本ケアアライアンス理事/HIP研究会理事/日本在宅医療連合学会評議員/日本緩和医療薬学会地域連携委員/日本ホスピス協会役員及びトータルヘルスプランナー(THP)/吹田市薬剤師会副会長/健康サポート薬剤師/実務実習指導薬剤師/学校薬剤師(2校)

高齢化社会の進展や尊厳ある終末期医療の必要性が高まるなかで、2000年代以降、日本でも認知が広まっているACP(アドバンス・ケア・プランニング)の概念がある。宇都宮氏は、薬剤師として、ACPをどう捉え、患者や家族と接するかを考えてほしいと、その普及に力を入れている。

「尊重しなくてはいけないと考えるようになりました。ベッドが病院から在宅に変わっただけじゃないんだと。家族の音がする、家族の音がする、匂いがする家に居たい。そこに薬剤師は薬を持っていくわけですので、患者さんの気持ちに対して『わかりません』とは言えないわけです。ACPという、心臓マッサージはしますか、人工呼吸器を使いますかとか、何か、問診票『みたいなことをやると認識している方もたくさんいるのですが、そうではないんです。訪問先の患者さんが、今、どんな思いで、どんなふうに生きていきたいのか。薬剤師はそんな患者さんの生きることに着目して在宅医療を追求してほしい。『私は最期をどうしたいかと言えない立場ではない』と考えてしまう薬剤師もいるかもしれないけれど、そんなことはないよとお伝えしたいです。私たちが臨床に近いところの学びを大事にしていることにも通ずるのですが、病態によって、これから進む経過は概ね予測できます。その瞬間までに、やりたいことをやらせてあげるといえるのは、医療介護従事者としてとても大事なことです。その瞬間はなかなか見極めが難しいですけど、今、患者さんがなにを必要としているのか、それをやるようにするにはどうすればいいか、という視点を持つ機会として、ACPを考えてもらいたいです」

「元気が時から、慢性的な疾患になっても、長いお付き合いをさせていただくというのが実は薬局なんです。風邪を引いても薬局です。お付き合いの中で、病状だけではなくて、家族構成とか、ご本人の趣味や職業なんかも把握できているんです。ですから、その方が最期の時に何を必要とされるかも、ある程度想像ができる。薬局はその方の人生に長く関わることができる、そ

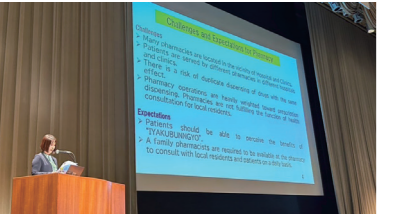
大阪ファルマプランでは、薬剤師の技術を高めるために、1991年から医療機関の専門外来での臨床研修に取り組んでいる。専門外来の医師のそばで週1回の研修を受けることで、臨床に近いところの学びを得ることが目的と宇都宮氏はいう。「研修では、医師がどんな思いで薬をスタートさせて、どんな説明をしているか、患者さんへの指導の様子などを、医師のそばについて2年間勉強させてもらっています。在宅に携わるなら、患者さんの未来を想像する知識も必要です。在宅から入院をされる患者さんが、退院後にどういう状態で自宅に戻られるのかをイメージできるかどうかは、大事なポイントなんです。同じ状態のまま帰ってこられるのがベストですが、例えば麻痺や嚥下障害が残って帰ってくることもあります。そういうことを予想して、次の在宅ではどんな展開をするかを想定して動けるようになるための学びの場です」

専門性を高め互いに
尊重し合える関係づくり

5年目の薬剤師の「登竜門」と話す臨床研修。臨床に近いところでの学びを経験し、受け皿としての薬局はどう構えておくべきかを一人ひとりが考え現場に活かす機会になっている。

臨床での研修経験を通じて
在宅の受け皿を磨く

介護保険制度以前から、30年以上に渡り在宅訪問に携わってきた宇都宮氏、自宅に赴く薬剤師に必要なこととして、「訪問薬剤管理指導の質を常に向上させること」だと話す。質を高めるために、関連学会や職能団体とのつながりの中で、知識をブラッシュアップし、多職種にフィードバックすることが、結果、患者さんのQOLを高めることにもつながるといいます。



第30回国際HPHカンファレンス(広島開催)での発表の様子。

あおぞら薬局
大阪府大阪市
西淀川区野里3-6-8

「健康サポート薬局は、行政に認められた薬局です。処方箋を待たずに、地域の方にとつてなくてはならない薬局でありたいと思っています。行政側から発したい情報やサービスも集まってくれば、社会福祉的な活動にもつながります。例えば行政サービスやケアマネージャーさん、地域包括ケアと地域の方とのつながり役とか。困りごと、誰に相談したらいいのか分からないをキヤッチできるような、そんな施設になるといいなと思っています」

あおぞら薬局は2015年1月に、WHO(世界保健機関)の「国際HPHネットワーク」に、薬局として世界で初めて登録された。海外でも類を見ない薬剤師の在宅医療への取り組みは、特に高齢化が進む国からも注目を集めている。宇都宮氏は、先駆けの存在として、日本の在宅医療における薬剤師が果たす役割についても、発信をしている。

「元気が時から、慢性的な疾患になっても、長いお付き合いをさせていただくというのが実は薬局なんです。風邪を引いても薬局です。お付き合いの中で、病状だけではなくて、家族構成とか、ご本人の趣味や職業なんかも把握できているんです。ですから、その方が最期の時に何を必要とされるかも、ある程度想像ができる。薬局はその方の人生に長く関わることができる、そ

「専門性を理解し合うことは、自分たちの技術を磨くことにもつながる。薬剤師全員が在宅に携わるからこそ、使命感を持つことへの意識も高まる。あおぞら薬局で毎朝開かれている全体朝礼では、患者さんの情報共有だけでなく、現場でどんな「場所」だと私は思っています」

大阪ファルマプランの掲げる目標の中には「非営利共同」、「まちづくり」という言葉がでてくる。設立当初から変わらないうこの考えについて、宇都宮氏は「地域の方の健康になりたいという思い、ヘルスリテラシーを支えるような情報発信をするのが薬局の役目」と語る。地域に存在している「場所」だからこそ、利益は地域に還元する。無料の健康教室や管理栄養士による栄養相談、地域のフードバンクのボランティアなど活動は幅広い。これからもグローバルな視点と地域に根ざすローカルな取り組みを積み重ねながら、地域住民の健康を支え続けることだろう。